

県立美術館本館(熊本市中央区)で開かれた「熊本地震と文化財」展(4~7月)は、レスキュー事業で救出された地震の被災史料や美術工芸品を一堂に集めた。未指定文化財だが優れた作品を発掘する機会となり、熊本の文化、美術、工芸の裾野の広がりをも再確認した。

その意味では、御船町出身の洋画家、故田中憲一さんの被災絵画の修復活動も意義深い。未指定文化財だが、地元の人らが全壊したアトリエから救出し、絵画保存修復家の岩井希久子さん(同市出身)を中心に修復が進められている。修復を終えた数点が県立美術館本館(4~7月)と同町恐竜博物館(10~11月)で披露された。

菊池川流域に光

幕末の思想家横井小楠の没後150年を記念した展覧会が県立美術館本館で開かれた(1~3月)。菊池川流域の米作りに関わる文化財群の「日本遺産」認定を記念し



被災文化財 紹介 「デザインあ」展10万人

た同館での特別展(7~9月)は、菊池一族の活躍を中心に、弥生時代から連綿と続く稲作や、流域の文化と歴史に光を当てた。同館では熊本城大天守外観復旧記念「熊本城と武の世界」展(10~12月)もあり、城の歴史と加藤・細川家の武にまつわる品々を並べた。熊本市現代美術館(同市中央区)の「デザインあ」展(6~9月)は入場者数が10万人を突破して同館歴代2位。身近なものをデザイン的な視点で捉えて体感する展示が広く受け入れられた。「きっかけは『彫刻』。」「展(9~11月)は、明治期の彫刻から現代の立体造形まで年代ごとに通観した。

相次ぐ回顧展

2018年に逝去した版画家・彫刻家の浜田知明さんの回顧展(県立美術館本館、4~5月)は未発表作を含む約230点を主題や造形に分け展示した。回顧展はほかに、画家・版画家の秀島由己男さん(7月、島田美術館)、戦後の熊本美術界に影響を与えた画家、境野一之さん(4~7月、つなぎ美術館)もあった。

陶芸家山本幸一さん(同市)の個展(9~10月)は、これまでの創作をたどるとともに、今後の「挑戦」を予感させる展覧会だった。元県知事の細川護国さんは9月、仏教伝来の道のりをイメージした障壁画を世界遺産・薬師寺(奈良市)の慈恩殿に奉納。崇城大芸術学部教授で彫刻家の勝野眞言さんは10月、改組新第6回日展彫刻部門で最高賞の文部科学大臣賞に県内で初めて選ばれた。熊本市現代美術館長の桜井武さんが6月に75歳で死去した。

(魚住有佳)

修復された田中憲一さんの作品を前に、修復時の思いを語る岩井希久子さん(中央)ら。10月、御船町恐竜博物館